

ローマ、2010年12月10日 (ZENIT.org.)

「毎日、世界中で信仰のために殺される人のうち57%がキリスト信者である」というのは、被昇天の自由大学学長 LUMASA (Libera Università Maria Santissima Assunta) のジョゼッペ・ダッラ・トッレである。この大学で、去る11月に「キリスト教を狙う戦争。21世紀の悲劇の目撃者」というテーマでパネルディスカッションが開かれた。

このパネルディスカッションのタイトルは欧州議会の議員マリオ・マウロの書物からとったものである。マウロ氏は人種差別とキリスト教徒の迫害に対する抗議の分野での欧州安全保障協力機構の代表者で、世界でもっともひどい迫害が行われている場所の一つ、イラクで毎日見られる迫害の悲劇を語るために、このディスカッションに参加した。

「今日では、イエス・キリストを信じることは命の危険を伴う。しかし、宗教自由は、ヨハネ・パウロ2世が言われたように、残りの諸々の自由があるかどうかを示す指標である。(下略)」

イラクのキリスト教徒は、辱められ迫害され、何千の単位で生まれ故郷を離れている。また、北部に逃れたり、外国、とくにヨルダンに避難したりしている。

キリスト教がイスラーム教徒の原理主義者にとって危険分子に思われるのは、現実を理解する特殊な能力のためである。その上、『アジア・ニュース』の編集長の Bernardo Crevellera 神父によると、「キリスト教徒は、異なる民族間を和解させるために効果的に働いている。彼らのおかげで、平和的な共生ができるのではという希望が保たれている。これは、イスラーム教徒にとって、近代に自己を開く最後のチャンスである」

LUMASAの学長は、この悲劇は故意の沈黙によって隠されていると確信している。マウロは具体的に欧州の当局者たち、なかでも欧州議会の責任を指弾する。「イラクにおける迫害されたキリスト教徒を保護する手立てを可決するのに、なんと10年もかかったのです」と。また、この点に関して国連も何も声明も出していないことを非難する。

この欧州議会の決定とは、去る11月25日に可決されたもので、宗教の自由を含めた種々の自由が認められているかどうかを援助の条件とするものである。

また10月31日にバグダードのシリア・カトリック教会で起こった60人の殺害を忘れないため、イタリアとバチカン駐在のイラクの外交官たちは、12月9日にローマで追悼行事をすることにした。

Zenitの読者には既知のことであるが、イラクのカトリック教会にとって最近の苦しみの一つは、サダム・フセイン体制で外務大臣を務めた Tarek アシズ (カルデア典礼のカトリック信者) の死刑判決である。もしこの刑が執行されたら、様々な宗教間の暴力を引き起こす可能性がある。アシズはカトリック信者の擁護に努めた人物で、イラク戦争を避けるために聖座は他の多くの国との交渉に全精力を傾けた人でもあった。

イラクでは、最近の反キリスト教徒運動の激化を前に、キリスト教徒の Yunadem が委員長を勤める特別な委員会が立ち上げられた。この委員会が受けた一つの提案が、キリスト教徒の守護に当たる特別な情報機関を作ることである。

このほかに、信者の出国を防ぐために、キリスト教徒の不動産の売却を禁じる法令が可決された。この社会の一分子を救うために、虐殺の被害者の補償と、害を受けた家屋や教会の建物の修復に当てるための基金の創設も求められた。

しかし、イスラーム過激派の暴力に力で対抗しようとするグループも現れている。Kalamlis では、包囲されたカトリック信者たちが自己防衛の体制を組織しようとしている。民兵がこもる兵舎は、ちょ

うど聖アダイ教会の正面に置かれている。

司令官の建物は、以前は郵便局であった。そこから、Shaker Benjamin と Latif Issa, ( サダムの軍隊の元将校、48歳。サダム体制の崩壊後失職 ) が危険な状態にある5千人のキリスト教徒の防衛を無報酬で引き受けている。243人の兵士からなるまさに十字軍とも呼べるこの軍隊を指揮するのは、前政権のイラク軍に勤めていた10人の将校である。兵士たちは全員志願兵で、教会の募金からでるわずかの給与で満足している。

より詳しい情報は、ZENIT: <http://www.zenit.org/article-37474?l=spanish>,  
<http://www.zenit.org/article-37410?l=spanish>,  
<http://www.zenit.org/article-37440?l=spanish>.